

## ● 編集後記

本誌掲載の論文は、依頼原稿や外国人研究者の論文など、査読になじまないもの以外はすべて、編集委員等の厳密な審査を経て掲載する原則です。ところが、これでは困った事態が生じます。編集委員自身の論文を載せることができないのです。もちろん、編集委員会とは別に論文の審査会を催せばよいのですが、現実的ではありません。そこで、編集委員の論文に限って、第2号まで存在した「研究報告」というカテゴリーで掲載することにしました。今号には拙稿を収録させていただきました。査読を経てはおりませんが、できるだけ他の論文の水準に近づけるよう努力したつもりです。  
(仁木 宏・編集委員長)

今回は「執筆の手引」を採録決定後に配布しました。各篇がそれぞれの個性を發揮しながらも「統一性のある仕上がり」を目指したのですが、果たして達成されているでしょうか。なお、4月からAさんがスタッフとして加わられました。Dさん・Aさんお二人の支えのおかげで、日常的な運営は非常にスムーズになりました。  
(M.I.)

参加してはや三度目の編集後記、いまだ仕事の要領を得ず、あたふたして皆様にご迷惑をおかけすることも少なくなかったように思います。次号はせめて足を引っ張らぬよう、気を引き締めなおして取り組んで参りたいと考えております。  
(金蔵)

Once again, I have enjoyed working on this journal, even though my contribution has been a small one and I feel that others have done most of the hard work. I look forward to being able to work on future issues.  
(I.R.)

今号より編集委員に加わらせていただきました。学術誌の編集自体も初めての経験で戸惑うこともありましたが、何とか任務を果たすことができました。まだまだ至らぬ点の多い私ですが、本誌のさらなる発展に力を注ぐとともに、自分自身もステップアップできたらと思う次第です。  
(K.K.)

第4号も、編集主任のM.I.さん、仁木編集委員長、事務局のDさん、それに新たに編集を補佐して下さったAさんのおかげで、無事刊行を迎えることができました。編集委員会が発足して丸2年になりますが、号を重ねるごとにフォーマットが固まり、ますます学術誌としての完成度が高くなってきています。雑誌の成長に比べて、我が身の成長のなさを痛感するこのごろです。  
(土)

基礎的なものよりも応用的・学際的なものを、好んで促成栽培するような時代の空気。そんな空気を肌を感じるが多くなりました。時代の流れだから、流れに乗るべきなのか、それとも……。愚物には悩み多き秋の到来です。それはともかく、今回も多くの人のご助力と寛容のうちに、遅々とした仕事の歩みをなんとか終わりまで運ぶことができました。この場をおかりして皆さんに感謝し、至らなかつた点をお詫びします。  
(T.T.)